



アジアンパーティーは、「アジアと創る」をコンセプトに、アジアの人、モノ、情報が集う社交場をイメージしています。

主要事業である「The Creators」、「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「福岡アジア文化賞」の三つを柱に、民間企業・団体等と連携した様々なイベントを開催し、全25事業で約66万人に参加いただきました。



アジアンパーティーPRポスター



The Creators 2019.9.21 Sat



アジアフォーカス・福岡国際映画祭 2019.9.13 Fri-19 Thu



# 第30回 福岡アジア文化賞

## FUKUOKA PRIZE 2019

学術  
研究賞



レオナルド・ブリュッセイ  
Leonard BLUSSÉ  
(オランダ / 歴史学者(東南アジア史専門家))

大賞



ランドルフ・ダビッド  
Randolf DAVID  
(フィリピン / 社会学者)

芸術・  
文化賞



佐藤 信  
SATO Makoto  
(日本 / 劇作家、演出家)

### 報告書

主催 福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団  
後援 外務省、文化庁

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局  
〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市総務企画局国際部内  
TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130  
Email: acprize@gol.com http://fukuoka-prize.org/

# 福岡アジア文化賞の受賞者

■ = 創設特別賞 ■ = 大賞 ■ = 学術研究賞 ■ = 芸術・文化賞

- パキスタン**
- 第7回 **ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン** (カウワーリー歌手)
  - 第17回 **アクシ・ムフティ** (民俗文化保存専門家)
  - 第27回 **ヤスミン・ラリ** (建築家・人道支援活動家)

- ネパール**
- 第15回 **ラーム・ダヤル・ラケーシュ** (民俗文化研究者)

- インド**
- 第2回 **ラヴィ・ジャンカール** (音楽家・シタール奏者)
  - 第5回 **パドマー・スプラマニヤム** (舞踊家)
  - 第8回 **ロミラ・ターパル** (歴史学者)
  - 第15回 **アムジャッド・アリ・カーン** (サロード奏者)
  - 第18回 **アシシュ・ナンディ** (社会・文明評論家)
  - 第20回 **パルタ・チャタジー** (政治学・歴史学者)
  - 第23回 **ヴァンダナ・シヴァ** (環境哲学者)
  - 第24回 **ナリニ・マラニ** (アーティスト)
  - 第26回 **ラーマチャンドラ・グハ** (歴史学・社会学)
  - 第27回 **A.R.ラフマーン** (作曲家・作詞家・歌手)
  - 第29回 **ティージャン・バーイー** (バンダワーニー奏者)

- アジア以外の国・地域**
- 英国**
- 第1回 **ジョゼフ・ニーダム** (中国科学史研究者)
  - 第28回 **クリス・ベーカー** (歴史学者)

- アイルランド**
- 第11回 **ベネディクト・アンダーソン** (政治学者)

- オーストラリア**
- 第5回 **王廣武** (歴史学者)
  - 第13回 **アンソニー・リード** (歴史学者)
  - 第24回 **テッサ・モーリス＝スズキ** (アジア地域研究者)

- フランス**
- 第20回 **オギュスタン・ペルク** (文化地理学者)

- ドイツ**
- 第22回 **ニールズ・グッチョウ** (建築史家・修復建築家)

- オランダ**
- 第30回 **レオナルド・ブリュッセイ** (歴史学者[東南アジア史専門家])



第30回学術研究賞受賞者  
レオナルド・ブリュッセイ

- 米国**
- 第2回 **ドナルド・キーン** (日本文学・文化研究者)
  - 第3回 **クリフォード・ギアツ** (文化人類学者)
  - 第6回 **ナム・ジュン・パイク** (ビデオアーティスト)
  - 第9回 **スタンレー・J・タンバイア** (人類学者)
  - 第21回 **ジェームズ・C・スコット** (政治学者・人類学者)
  - 第25回 **エズラ・F・ヴォーゲル** (社会学)

- 中国**
- 第1回 **巴金** (作家)
  - 第4回 **費孝通** (社会学・人類学者)
  - 第7回 **王仲殊** (考古学者)
  - 第13回 **張芸謀** (映画監督)
  - 第14回 **徐冰** (アーティスト)
  - 第15回 **厲以寧** (経済学者)
  - 第17回 **莫言** (作家)
  - 第20回 **蔡國強** (現代美術家)
  - 第28回 **王名** (行政学者、NGO・市民社会研究者)
  - 第29回 **賈樟柯** (映画監督)

- ミャンマー**
- 第11回 **タン・トゥン** (歴史学者)
  - 第16回 **トー・カウン** (図書館学者)
  - 第26回 **タン・ミン・ウー** (歴史学者)
- ブータン**
- 第16回 **タシ・ノルブ** (伝統音楽家)

- スリランカ**
- 第13回 **キングスレー・M・デ・シルワ** (歴史学者)
  - 第15回 **ローランド・シルワ** (文化遺産保存建築家)
  - 第19回 **サヴィトリ・グナセーカラ** (法学者)
- バングラデシュ**
- 第12回 **ムハマド・ユヌス** (経済学者)
  - 第19回 **フォリダ・パルビーン** (音楽家)

- タイ**
- 第1回 **ククリット・プラモート** (作家・政治家)
  - 第5回 **スパトラディット・ディッサクン** (考古学・美術史学者)
  - 第10回 **ニティ・イヨウシーウォン** (歴史学者)
  - 第12回 **タワン・ダッチャニー** (画家)
  - 第18回 **シーサク・ワンリポードム** (人類学・考古学者)
  - 第23回 **チャンウィット・カセートシリ** (歴史学者)
  - 第24回 **アピチャッポン・ウィーラセタクン** (映画作家・アーティスト)
  - 第28回 **パーサク・ボンパイチット** (経済学者)

- インドネシア**
- 第2回 **タウフィック・アブドゥラ** (歴史学者・社会学)
  - 第6回 **クンチャラニグラット** (文化人類学者)
  - 第9回 **R. M. スダルソ** (舞踊家・舞踊研究者)
  - 第11回 **プラムディヤ・アナンタ・トゥール** (作家)
  - 第23回 **クス・ムルティア・パク・ブウォノ** (宮廷舞踊家)
  - 第25回 **アジュマルディ・アズラ** (歴史学者)

- モンゴル**
- 第4回 **ナムジリン・ノロバンザト** (音楽家)
  - 第17回 **シャグダリン・ビラ** (歴史学者)

- 香港**
- 第19回 **アン・ホイ** (映画監督)
  - 第25回 **ダニー・ユン** (文化クリエイター)
- 台湾**
- 第10回 **侯孝賢** (映画監督)
  - 第18回 **朱銘** (彫刻家)

- ラオス**
- 第16回 **ドアンドゥアン・ブンニャウォン** (織物研究者)
- ベトナム**
- 第7回 **ファン・ファイ・レ** (歴史学者)
  - 第26回 **ミン・ハン** (ファッションデザイナー)

- カンボジア**
- 第8回 **チェン・ポン** (劇作家・芸術家)
  - 第22回 **アン・チュリアン** (民族学者・クメール研究者)
  - 第28回 **コン・ナイ** (吟遊詩人、チャバイ・マスター)
- フィリピン**
- 第3回 **レアンドロ・V・ロクシン** (建築家)
  - 第12回 **マリルー・ディアス＝アバヤ** (映画監督)
  - 第14回 **レイナルド・C・イレート** (歴史学者)
  - 第23回 **キドラット・タヒミック** (映画作家)
  - 第27回 **アンベス・R・オカンボ** (歴史学者)
  - 第30回 **ランドルフ・ダビッド** (社会学)

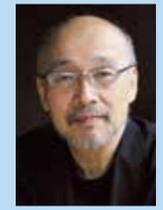
- マレーシア**
- 第4回 **ウンク・A・アジズ** (経済学者)
  - 第11回 **ハムザ・アワン・アマット** (影絵人形遣い)
  - 第13回 **ラット** (マンガ家)
  - 第19回 **シャムスル・アムリ・バハルディーン** (社会人類学者)

- シンガポール**
- 第10回 **タン・ダウ** (ビジュアルアーティスト)
  - 第14回 **ディック・リー** (シンガーソングライター)
  - 第21回 **オン・ケンセン** (舞台芸術家)



第30回大賞受賞者  
ランドルフ・ダビッド

- 日本**
- 第1回 **黒澤明** (映画監督)
  - 第1回 **矢野暢** (社会学者)
  - 第2回 **中根千枝** (社会人類学者)
  - 第3回 **竹内實** (中国研究者)
  - 第4回 **川喜田二郎** (民族地理学者)
  - 第5回 **石井米雄** (東南アジア研究者)
  - 第6回 **辛島昇** (歴史学者)
  - 第7回 **衛藤 藩吉** (国際関係研究者)
  - 第8回 **樋口隆康** (考古学者)
  - 第9回 **上田正昭** (歴史学者)
  - 第10回 **大林太良** (民族学者)
  - 第12回 **速水 佑次郎** (経済学者)
  - 第14回 **外間 守善** (沖縄学者)
  - 第17回 **濱下 武志** (歴史学者)
  - 第20回 **三木 稔** (作曲家)
  - 第21回 **毛里 和子** (現代中国研究者)
  - 第24回 **中村 哲** (医師)
  - 第29回 **末廣 昭** (経済学者・地域研究者[タイ])
  - 第30回 **佐藤 信** (劇作家・演出家)



第30回芸術・文化賞受賞者  
佐藤 信

## CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者	1-2
福岡アジア文化賞とは	3-4
第30回受賞者	
大賞 ランドルフ・ダビッド	5
学術研究賞 レオナルド・ブリュッセイ	6
芸術・文化賞 佐藤 信	7
授賞式	8~12
市民フォーラム	
ランドルフ・ダビッド	13
レオナルド・ブリュッセイ	14
佐藤 信	15
受賞者による学校訪問	16
第30回記念 歴代受賞者によるシンポジウム	17-18
第30回記念パネル展	19
共催・協力事業・報道	20
歴代受賞者名鑑	21~26

## 福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア

文化賞を創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

**1. 目的** アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

## 2. 賞の内容

<b>大賞</b> 賞金 ¥5,000,000 アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。	<b>学術研究賞</b> 賞金 ¥3,000,000 人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。	<b>芸術・文化賞</b> 賞金 ¥3,000,000 アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。
--	---	--

**3. 対象圏域** 東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

**4. 主催** 福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団\*



\*福岡よかトピア国際交流財団:アジア太平洋博覧会-福岡'89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

## 福岡アジア文化賞委員会委員

2019年12月現在 五十音順、敬称略

特別顧問	宮田 亮平	文化庁長官	〃	楠 正信	福岡市議会副議長
〃	志野 光子	外務省国際文化交流審議官	〃	久保田 勇夫	株式会社西日本シティ銀行取締役会長
〃	小川 洋	福岡県知事	〃	桑田 一郎	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表
名誉会長	高島 宗一郎	福岡市長	〃	榎 泰輔	九州産業大学学長
会長	藤永 憲一	(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長	〃	酒見 俊夫	西部ガス株式会社代表取締役会長
副会長	久保 千春	九州大学総長	〃	朔 啓二郎	福岡大学学長
〃	阿部 真之助	福岡市議会議長	〃	佐藤 尚文	株式会社九電工取締役会長
〃	中村 英一	福岡市副市長	〃	佐藤 靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
監事	谷川 浩道	福岡市社会福祉協議会会長	〃	塩田 康一	九州経済産業局長
〃	水町 博之	福岡市会計管理者	〃	柴戸 隆成	株式会社福岡銀行取締役頭取
委員	市村 友一	朝日新聞社執行役員西部本社代表	〃	竹島 和幸	西日本鉄道株式会社取締役会長
〃	岩月 理浩	九州運輸局長	〃	多田 昭重	福岡文化連盟会長
〃	岩松 城	毎日新聞社取締役西部本社代表	〃	田村 やよひ	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	歌川 信郎	日本放送協会福岡放送局長	〃	中井 一平	読売新聞西部本社代表取締役会長
〃	打越 基安	福岡市議会総務財政委員会委員長	〃	星子 明夫	福岡市教育委員会教育長
〃	江口 勝	福岡県副知事	〃	葉真寺 偉臣	九州電力株式会社代表取締役副社長執行役員
〃	唐池 恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長	〃	G.W. パークレー	西南学院大学学長
〃	川崎 隆生	西日本新聞社相談役			

## 第30回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

<b>福岡アジア文化賞審査委員会</b> 委員長 / 久保 千春 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長 副委員長 / 中村 英一 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長 委員 / 石坂 健治 日本映画大学教授 東京国際映画祭プログラミング・ディレクター 芸術・文化賞選考委員会委員長 委員 / 後小路 雅弘 九州大学大学院人文科学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長 委員 / 清水 展 関西大学特任教授、京都大学名誉教授 学術研究賞選考委員会委員長 委員 / 竹中 千春 立教大学法学部教授 学術研究賞選考委員会副委員長 委員 / 柄 博子 国際交流基金理事 委員 / 土屋 直知 株式会社正興電機製作所 代表取締役会長	<b>福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞</b> 委員長 / 清水 展 関西大学特任教授 京都大学名誉教授 副委員長 / 竹中 千春 立教大学法学部教授 委員 / 天児 慧 早稲田大学名誉教授 委員 / 木宮 正史 東京大学大学院 総合文化研究科教授 委員 / 河野 俊行 九州大学大学院法学研究院教授 委員 / 清水 一史 九州大学大学院 経済学研究院教授 委員 / 新田 栄治 鹿児島大学名誉教授 委員 / 脇村 孝平 大阪経済法科大学 経済学部教授	<b>福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞</b> 委員長 / 石坂 健治 日本映画大学教授 東京国際映画祭プログラミング・ディレクター 副委員長 / 後小路 雅弘 九州大学大学院 人文科学研究院教授 委員 / 内野 儀 学習院女子大学日本文学科教授 東京大学名誉教授 委員 / 宇戸 清治 東京外国語大学名誉教授 委員 / 小川 忠 跡見学園女子大学文学部教授 委員 / 寺内 直子 神戸大学大学院 国際文化学研究所教授 委員 / 西村 幸夫 神戸芸術工科大学教授 委員 / 松隈 浩之 九州大学 芸術工学研究院准教授
---	---	---

2019年12月現在 50音順、敬称略



## ランドルフ・ダビッド *Randolf DAVID*

フィリピン/社会学者

### 主な経歴

1946	フィリピン中部ルソン地域パンパンガ州サンフェルナンド市生まれ	2003	ラモン・マグサイサイ賞財団 (RMAF) 会長
1965	フィリピン大学ディリマン校卒業(社会学学士)その後英国マンチェスター大学大学院に進学	2007	アテネオ大学 ナガ校から人文科学名誉博士号授与
1967-2011	フィリピン大学社会学、政治社会学、開発社会学教授	2007-09	ヨーク基金理事会委員
1977-92	フィリピン大学第三世界研究所創設所長	2007-12	フィリピン農村再建運動 (PRRM) 顧問
1983-88	同研究所ジャーナル <i>Kasarinlan</i> (和訳: 自主自立) 編集長	2008	フィリピン大学センテニアル研究員に指名
1986-95	国連大学展望プログラム東南アジアコーディネーター	2008-10	フィリピン教育演劇協会 (PETA) 理事
1986	公共テレビIBC-13局トーク番組「パブリック・フォーラム」制作者兼司会者	2009	スイス国際関係学ネットワーク研究プロジェクト: the 'Feminisation' of Anti-poverty Policies and International Organizations: The Cases of Brazil, the Philippines and Mozambique 主要メンバー
1986	フィリピン社会学者連盟 (BISIG) 会長	2010-16	フィリピンUNESCO国内委員会人文・社会学小委員会(クラスター)委員長
1991	龍谷大学客員研究員	2011-	フィリピン大学名誉教授
1995-	フィリピンの有力紙「インクワイアラー」にて <i>Public Lives</i> のコラム執筆	2011-	フィリピン国内メディアABS-CBNコーポレーション相談役
1996	メキシコ国立自治大学客員講師	2012-14	フィリピン保健省国家倫理委員会委員
1999	フィリピン大学理事	2015-	アテネオ・デ・マニラ大学ロジョラ校 諮問機関委員
2002-05	ラモン・マグサイサイ賞財団 (RMAF) 理事	2019-	ラモン・マグサイサイ賞財団 (RMAF) 理事

### 主な受賞歴

- 2002 ナショナル・ブック・アワード社会科学部門 (*Reflections on Sociology and Philippine Society*)
- 2003 ナショナル・ブック・アワード社会科学部門最優秀書籍 (*Nation, Self and Citizenship: An Invitation to Philippine Sociology*)
- 2011 アテネオ・デ・マニラ大学、オザナム賞
- 2013 パシフィック・カソリック大学、ノブレス・オブリージュ賞
- 2014 フィリピン、デ・ラ・サール大学、Lasallian 学校賞
- 2015 プリント・メディア・アソシエーション・オブ・フィリピン・メディア大賞、ベスト・オピニオン・ライター賞

### 主な著作

- ・*Public Lives: Essays on Selfhood and Social Solidarity*, Anvil Publishing, 1998.
- ・「鶴見良行の国境の超え方」(PARC BOOKLET) (共著), アジア太平洋資料センター, 1999.
- ・*Reflections on Sociology and Philippine Society*, University of the Philippines Press, 2001.
- ・*Nation, Self and Citizenship: An Invitation to Philippine Sociology*, University of the Philippines Press, 2002.

### 贈賞理由

ランドルフ・ダビッド氏は、社会学者としての知見を大学教育で学生に伝えるのみならず、テレビ番組や新聞コラムなどを通じて広く市民とも共有することで、フィリピンにおける社会的正義の実現のために積極的に活動してきた。また国連大学や日本の大学・知識人とも連携協力しながら、アジア諸国の知的・文化的交流と相互理解のために尽力してきた。大学を社会に開き、市民とともに、また海外との連携をとおして、今ここにある社会をより良いものに変えてゆこうとする志と活動は、アジアを代表するパブリック・インテレクチュアル(行動する知識人)として高く評価されている。

ダビッド氏は、1946年にフィリピン中部ルソン地域、マニラ北方のパンパンガ州サンフェルナンド市で生まれた。15歳で国立フィリピン大学ディリマン校に入学し、社会学を専修して優秀な成績で卒業。すぐに社会学科の非常勤講師となり、次いで将来を嘱望される俊英としてロックフェラー財団の奨学金を得て英国のマンチェスター大学大学院に留学した。しかし、博士論文を作成するための調査でフィリピンに戻っているとき、1972年9月にマルコス大統領が戒厳令を公布。このため、英国での学業を続けず、フィリピンの政治社会の激動のなかに身を置き、自らもこの状況に関わって生きてゆくことを選択した。母校に戻って専任の講師となり、以後、教育者・研究者として、またフィリピン社会のオピニオン・リーダーとして、民主主義と社会改革、正義の実現のために積極的な社会関与と貢献を続けている。

ダビッド氏は1977年に国立フィリピン大学に第三世界研究所

を設立し、強権的な上からの開発がもたらす弊害や新興独立国の抱える問題などの分析と、それへの対策、そして民衆を主役とする社会発展の道を模索した。国連大学のパートナー機関としてASEAN各国の研究者を招いて研究プロジェクトを支援するほか、外国人留学生や国内外のNGO関係者や活動家も広く受け入れ、その研究成果を1985年に創刊した雑誌 *Kasarinlan* (和訳: 自主自立) で発信した。アジア研究者として著名な鶴見良行氏の『バナナと日本人』(1982年)の出版も、ダビッド氏の全面的な支援による現地調査と資料収集で可能になった。

社会と積極的に関与する姿勢は、1986年2月に独裁を倒し民主化を進めた「ピープル・パワー革命」以降、毎週のテレビ討論番組「パブリック・フォーラム」の制作に加わりまた司会者として重要な役割を果たすことに繋がっていく。そこでは13年にわたり時々の政治、経済、社会に関わる喫緊の課題を取り上げ、一般市民を招いて政府の担当責任者や当事者との、時に熱く激しいフィリピン語(国語)での討論のコーディネーターとして公論形成に寄与した。また1995年からは有力新聞「インクワイアラー」にコラム欄を持ち、英語による発信を続けて現在に至る。それらの時事批評は3冊の本にまとめて出版されており、大学生のための社会学教科書とともに、平易な言葉で問題点を説き解決の方途を示し続けている。

このように、自国の社会発展とアジア社会の相互理解と市民レベルの交流に多大な貢献を続けてきたランドルフ・ダビッド氏は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。



## レオナルド・ブリュッセイ *Leonard BLUSSE*

オランダ/歴史学者(東南アジア史専門家)

### 主な経歴

1946	オランダ、ロッテルダム生まれ	1998-2011	ライデン大学人文部歴史学科アジア・ヨーロッパ関係史教授
1973	京都大学人文科学研究所 日比野丈夫教授 研究助手(文部省奨学生)	2000-01	オランダ、人文社会科学高等研究所 (NIAS) 研究員
1972-75	ライデン大学Centre for the History of European Expansion (IGEER) アジア研究センター主任	2005-06	米国ハーバード大学歴史学科東南アジア史エラスムス教授
1978-89	ライデン大学博士号(歴史学)	2005-	東洋文庫名誉研究員
1986	ライデン大学歴史学科助教授	2006-11	ライデン大学東南アジア史教授代理
1987-96	プリンストン大学シェルビー・カラム・デービス歴史学センター客員研究員(フルブライト奨学金)	2010-	Academia Europaea 会員選出
1991-92	ライデン大学歴史学科准教授	2012-13	京都大学人文科学研究所招聘外国研究員
1996-98		2014-	ライデン大学名誉教授

### 主な受賞歴

- 1991-92 フルブライト奨学金
- 1998 金のフクロウ賞 ノンフィクション部門 最優秀賞
- 2006 オレンジ・ナッソー賞
- 2016 中国政府 National Special Book Award of China

### 主な著作

- ・「おてんばコルネリアの闘い 17世紀バタヴィアの日蘭混血女性の生涯」平凡社, 1988. (英語、インドネシア語訳版あり)
- ・「竜とみづばち 中国海域のオランダ人400年史」(共著) Otto Cramwinckel, (オランダ語、中国語訳版あり) 1989.
- ・*The Deshima Diaries (1640-1800) 1-13 vols* (共編) Intercontinenta, 日蘭学会, 1986-2010.
- ・「日蘭交流400年の歴史と展望: 日蘭交流400周年記念論文集」(共著) 日蘭学会、(オランダ語、日本語訳版あり) 2000.
- ・*The Archives of the Kong Koan of Batavia* (共著), Boston: Brill, 2003.
- ・*Visible Cities: Canton, Nagasaki and Batavia and the Coming of the Americans* (中国語訳版あり) ハーバード大学出版局, 2008.
- ・*The Formosan Encounter, Notes on Formosan Aboriginal Society. 4 vols.*, Shung Ye Museum of Aborigines. (中国語訳版あり), 2000-10.
- ・*The Chinese Annals of Batavia, The Kai Ba Lidai Shiji and other stories (1610-1795)* (共著): Brill Publishers, 2018.
- ・「東アジアにおけるオランダ東インド会社の盛衰—1640-60年代の「オランダ商館日記」に関する省察」『東京大学史料編纂所研究紀要』29号, 東京大学史料編纂所, 2019.

### 贈賞理由

レオナルド・ブリュッセイ氏は、広汎な時空間を対象とする「近世東アジア/東南アジア海域史」を開拓し、学際的なアプローチに基づく歴史学を確立した。中国研究から始まり、そこに日本研究の要素が加わり、さらには華僑研究を核とする東アジア海域史、そして東南アジア海域史へと視野が広がった。今日、「グローバル・ヒストリー」という歴史学の潮流が隆盛しているが、氏の学問こそまさに、ミクロな実証性に基づきつつ、マクロな視野を失わない理想的な形のグローバル・ヒストリーとして評価されている。

ブリュッセイ氏は、1946年オランダのロッテルダムに生まれた。1965年にライデン大学に入学し、中国研究を専攻した後、京都大学人文科学研究所(1972年-75年)などでの研究活動を経て、1975年以降は、ライデン大学において研究および教育に従事し、2011年まで「アジア・ヨーロッパ関係史」、「東南アジア史」などを講じた。

ブリュッセイ氏の研究は、ライデン史学とも呼ぶべき徹底した文献史学的手法に基づいている。17-18世紀に、バタヴィア(現ジャカルタ)、広東(現広州)、長崎などの港市をつないで行われたオランダ東インド会社(VOC)の交易活動に関連する膨大な文書が残されているが、氏の歴史学の強みはこのような史料を駆使したところにある。加えて、氏の研究には、その時代に生きた人々への強い関心を持ちつつ、個人の伝記的叙述を活用する手法という特徴もある。そのことが顕著に現れているのは、学位論文を基に出版された *Strange Company* (1986年) であり、その中の一章は「おてんばコルネリアの闘い: 17世紀バタヴィアの日蘭混血女性の生涯」

(1988年)として邦訳されている。ここでは、VOCが拠点としたバタヴィアで生きた一人の日蘭混血女性に関する伝記的叙述を通して、背後にある多様な出自を持つ人々の暮らす多エスニック社会としての都市バタヴィアの実相、特に東西の文化の交錯と軋轢が生々しく描かれている。

ブリュッセイ氏は、その後、*The Deshima Diaries(1640-1800) 1-13 vols* (1986年-2010年)などの諸史料の出版という実証史学における基礎的作業でも多くの業績を残す一方、近世東アジア/東南アジア海域史の分野においても、グローバルな視野の統合的な著作を執筆している。ハーバード大学で行われたライシャワー記念講義を基に出版された *Visible Cities* (2008年) では、広東、長崎、バタヴィアというVOCと関わりの深かった三つの港市の比較都市研究に取り組んだ。そこでは、近世から近代にかけて、ヨーロッパおよび米国の進出・拡大が、東アジア/東南アジアに如何なる影響を及ぼしたのか、またそれらの地域の対応、そして華僑の動向に示されるような自律的な商業活動の様相が如何なるものであったかなどが明解に描き出されている。

ブリュッセイ氏は、ライデン大学において、日本人を含むアジアから学びに来た多くの研究者を育ててきた。その多くは現在、歴史研究者として活躍しており、氏はその意味でもアジアとヨーロッパをつなぐ懸け橋としての役割を十分に果たしてきた。

このように、レオナルド・ブリュッセイ氏の業績はまことに顕著であり、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。



## 佐藤 信 SATO Makoto

日本／劇作家、演出家

### 主な経歴

1943	東京生まれ	1991-93	日中合作オペラ『まほうのふえ 魔笛』演出(東京、北京で上演)
1966	斎藤 憐(劇作家)、串田 和美(俳優、演出家)らとともに、「アンダーグラウンド・シアター劇場」を設立	1992-98	福島大学大学院教育学研究科 非常勤講師
1968	演劇センター68(→黒色テント 68/71→現、劇団黒テント)結成、参加	1997-2002	世田谷パブリックシアター 劇場監督
1969-74	文化庁オペラ研修所講師	1998	東南アジア演劇セミナー(日本演出家協会共催)コーディネーター
1970-90	大型テントによる、演劇の全国移動上演(全国120都市)	1998-2009	東京学芸大学教育学部表現コミュニケーション学科 教授
1980	フィリピン教育演劇協会(PETA)主催「国際ワークショップ」参加	2009-	座・高円寺(東京杉並区立杉並芸術会館)芸術監督
	国際交流基金主催「アジアの仮面展」、「ヤクシャガナ」(インド古典舞踊)公演コーディネーター	2010	座・高円寺劇場創造アカデミーカリキュラムディレクター
1982-88	東京芸術大学大学院オペラ研究部非常勤講師	2011-14	上海万博日本政府館 演出
1983	第三回アジア民衆演劇人会議 主催者代表	2011-14	早稲田大学演劇映像学連携研究拠点「能、昆劇の比較研究-日中伝統演劇の現在と未来」研究代表
1985-86	青山スパイラルホール 初代芸術監督	2012-15	中国南京市「朱鷺芸術祭」芸術顧問企画
1985-92	東急文化村オーチャードホール プロデューサー	2014-17	中国北京市 南鑼鼓巷演劇祭 独立系演劇人論壇ワークショップファシリテーター
1990	国際交流基金主催リサーチプログラム ACAW(Asian Contemporary Arts workshop)コーディネーター	2016-	Emergency Stairs(シンガポール)芸術顧問
	個人劇団「鴉座」設立	2017	横浜市中区若葉町に私設アートセンター
		2018	若葉町ウォーフを開設
			那边実験劇団(北京)芸術顧問

### 主な受賞歴

- 1969 紀伊國屋演劇賞 個人賞
- 1971 第16回岸田國土戯曲賞(『鼠小僧次郎吉』)
- 1989 ベオグラード国際演劇祭特別賞(江戸系あやつり人形芝居『マクベス』)
- 1989 イタリア賞、国際エミー賞脚色賞(NHK 作品『カルメン』)
- 1992 第10回中島健蔵音楽賞(『まほうのふえ 魔笛』など)

### 主な舞台演出作品(2010年以降)

・斎藤 憐『アメリカン・ラブソディ』演出・美術(座・高円寺) 2010-18.	・『あわせ日和』構成・演出・美術(鴉座) 2013-14.
・郭宝昆原作『The Spirits Play 霊戯』構成・演出・美術(鴉座) 2011-13.	・ベルナル＝マリ・コルテス『森の直前の夜』演出(鴉座) 2013-14.
・宮澤 賢治原作『ふたごの星』脚本・演出・美術(座・高円寺) 2011-15.	・『塚』作・演出・美術(北京 蓬蒿劇場) 2015, 2016.
・エドワード・ボンド『戦争戯曲集 三部作』演出(座・高円寺) 2011-18.	・『HER VOICE』演出・美術(鴉座) 2015-19.
・『リア』上演台本・演出(座・高円寺) 2013-14.	・『亡国のダンサー』作・演出・美術(劇団黒テント) 2017.
・『ピン・ボン』構成・演出・美術(座・高円寺) 2013-19.	・『絶対飛行機』作・演出(北京 蓬蒿劇場) 2017.
	・『舟もなく-no boat in site-』作・演出・美術(若葉町ウォーフ) 2018, 2019.
	・エマニュエル・ダルレ『火曜日はスーパーへ』演出・美術(鴉座) 2018-19.

### 贈賞理由

佐藤氏は演出家・劇作家として、現代的感覚と伝統的美意識を融合させた優れた舞台を数多く制作し、その革新的な取り組みが国内外で高く評価されている。また、アジアの演劇人との国際交流を主導し、地域を結ぶネットワーク構築を推進してきた。さらに、公共劇場の芸術監督として、「地域の人が集う場所としての劇場」というイメージを具現化する活動を展開し、旧来的な公共ホールイメージを一新した。近年は、後進の育成にも熱心に取り組んでいる。

佐藤氏は1943年東京生まれ。1966年、俳優座付属俳優養成所修了後、アンダーグラウンド・シアター自由劇場を結成。また、1968年には、演劇センター68(現、劇団黒テント)に参加、同時代の寺山修司氏、唐十郎氏らとともにアンクラ演劇を代表する劇作家・演出家として活躍した。1970年から大型テントによる全国移動上演を開始。90年までに全国120都市を巡回し、自らが作・演出した『鼠小僧次郎吉』(1971年・岸田國土戯曲賞受賞)や、『喜劇昭和の世界』三部作(1975年-79年)で、劇作家・演出家としての名声を確立した。その後も、自作品の演出以外に、オペラ、日本舞踊から人形芝居まで、多彩な分野の演出でも活躍している。

1980年、フィリピン教育演劇協会(PETA)主催の国際ワークショップに参加して以来、アジアへの関心を深め、第三回アジア民衆演劇人会議の主催者代表(1983年)をつとめるなど、アジアとの交流を開始。演劇を通じて社会的なメッセージを発信してきた。シンガポールのクオ・パオクン氏、マレーシアのクリシェン・ジット氏、インドネシアのレンドラ氏、香港のダニー・ユン氏(第25回福

岡アジア文化賞 芸術・文化賞受賞)ら同世代を代表する演劇人と親密な共働関係を築きあげた。また、日本におけるアジアの現代演劇紹介やアジアとの国際共同制作にも力を注いできた。

一方、劇場空間と制作現場の最前線を知る実務家として、公共劇場の開設・運営にも長年携わり、世田谷パブリックシアター初代劇場監督(1997年-2002年)、座・高円寺(杉並区立杉並芸術会館)初代芸術監督(2009年-)などを歴任。地域住民のためのワークショップを実施するなど、劇場と地域を結ぶ多様なアウトリーチ活動を展開し、「人が集まる場所としての劇場」というイメージの具現化に尽力した。そのため、公共劇場の新しい活動領域の開拓者としても、佐藤氏は高い評価を得ている。

1998年から2009年まで東京学芸大学教授として後進の育成にあたり、また、座・高円寺では、次世代の公共劇場の担い手を育てる「劇場創造アカデミー」を創設(2009年)。さらに、2017年、私財を投じて横浜市に私設のアートセンター「若葉町ウォーフ」を開場。日本を含むアジアの若手演劇人の交流と創作拠点としての同センターの活動が、いま、大きな注目を集めている。

このように佐藤氏は、演出家・劇作家として多大な功績を残したのみならず、演劇を通じたアジアとの国際交流においても先駆的役割を果たしてきた。また、公共劇場の芸術監督として、旧来的な公共ホールのイメージを一新し、アジアの若手演劇人を育成する事業にも熱心に取り組んでいる。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

# 第30回福岡アジア文化賞 授賞式

■日時:9月10日(火) 18:30~20:00 ■会場:福岡国際会議場 メインホール

## 式次第

### 【第1部】

#### 受賞者紹介

#### 主催者代表挨拶

#### おことば

#### 選考経過報告

#### 贈賞

福岡市長 高島 宗一郎

秋篠宮皇嗣殿下

福岡アジア文化賞審査委員会委員長 久保 千春

福岡市長 高島 宗一郎

公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団理事長

藤永 憲一

### 【第2部】

#### 祝賀パフォーマンス

#### 受賞者挨拶とインタビュー

芸術・文化賞受賞者演出パフォーマンス 結城座十二代目 結城 孫三郎

## 第30回 福岡アジア文化賞



# 第30回福岡アジア文化賞 授賞式



花束贈呈

歴代受賞者の紹介映像が大きなスクリーンに映し出され、幕を開けた第30回福岡アジア文化賞授賞式。会場である福岡国際会議場メインホールには、秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席のもと、各国ご来賓や各界関係者、アジア文化の発展に多大な貢献をした受賞者を祝おうと多くの福岡市民が一堂に会しました。

大きな拍手に迎えられ受賞者がステージに登場。まず初めに主催者代表である高島宗一郎福岡市長が登壇し、この賞を福岡市の交流と多様性を支える都市の財産として後世へ引き継いでいくことができるよう取り組みたいと挨拶しました。続いて秋篠宮皇嗣殿下よりお祝いのおことばを賜り、審査委員長の久保千春九州大学総長による選考経過報告を経て、高島市長と藤永憲一福岡よかトピア国際交流財団理事長より賞状とメダルが授与されました。最後に福岡インターナショナルスクールの子ども達か

らお祝いの花束を贈られると、厳かな雰囲気から一転、受賞者にも観客にも笑みがこぼれ、会場はお祝いムードに包まれました。

第2部はサウンドアーティスト伊藤花りん氏による祝賀パフォーマンスで開幕。受賞者による喜びのスピーチが行われた後は、インタビューの場も設けられました。

最後に結城座十二代目結城孫三郎氏による伝統芸能「江戸糸あやつり人形」が特別披露されました。うち一つは受賞者の佐藤信氏が構成・演出、モデルの故・山口小夜子氏が人形デザインを手掛けた演目。和紙製の美しい人形が、まるで生きているかのように動き出す姿に会場中が引き込まれ、佐藤氏演出の世界へと誘われました。

一段と華やかで感動的な雰囲気に包まれながら、第30回という節目にふさわしい授賞式は、幕を閉じました。



大賞のランドルフ・ダビッド氏への贈賞



高島福岡市長による主催者代表あいさつ



久保九州大学総長による選考経過の報告



賞状とメダルの授与



学術研究賞のレオナルド・ブリュッセイ氏への贈賞



芸術・文化賞の佐藤信氏への贈賞



サウンドアーティスト伊藤花りん



結城座十二代目結城孫三郎  
演目「獅子舞」「夢の浮橋～人形たちとの源氏物語より夕顔」



## 授賞式参加者の声

- 福岡アジア文化賞受賞者の言葉や業績を知る機会ができて良かった。アジア各国の人と、文化を通じて仲良くしたいと思う。
- アジア文化の今に触れることができ、感激した。
- このようなイベントを長く続けることで、アジア各国及び国内のアジアに関する人々に様々な良い影響を与えることができると思う。
- もっといろいろな事に目を向け、関わり、自分磨きをしたい。世界は広い。



## 秋篠宮皇嗣殿下おことば



本日、第30回福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、大賞を受賞されるランドルフ・ダビッド氏、学術研究賞を受賞されるレオナルド・ブリュッセイ氏、そして芸術・文化賞を受賞される佐藤信氏に心からお祝いを申し上げます。



また、本賞がこのたび30回の節目を迎えられたことは誠に喜ばしく、これまで市民とともに本賞の発展に力を尽くしてこられた福岡市をはじめ、多くの関係者に深く敬意を表します。

市と学界、民間が一体となって創設したこの「福岡アジア文化賞」は、古くからアジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するものであり、創設以来、アジアの文化とその価値を世界に示していく上で、顕著な役割を果たしてこられました。これまでの輝かしい受賞者の方々には、アジア地域のみならず、世界各地で活躍しておられる方が多数おられます。

私自身、アジアの国々をたびたび訪れ、多様な風土が作り出し、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の深さや豊かさに思いを馳せ、それらの保存・継承、更なる発展の大切さと、アジアを深く理解するための学術の重要性を強く感じてまいりました。その意味で、本賞は大変意義の深いものと認識しております。

私は先月、家族でブータンを訪問いたしました。その間のごく限られた範囲での見聞ではありますが、訪れた場所によっては約2000メートルの標高差があり、そのような自然環境を背景にした文化の違いに関心を抱き、このような視点も含め、アジアの文化の多様性を考えていくことが重要であるとも思いました。

本日受賞される3名の方々の優れた業績は、アジアのみならず広く世界に向けてその意義を示し、また社会全体でこれらを共有することによって、次の世代へと引き継ぐ人類の貴重な財産になると考えます。

終わりに、受賞される皆様に改めて祝意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がいつそう促進されていくことを祈念し、授賞式に寄せる言葉といたします。

### 大賞

ランドルフ・ダビッド



#### 人の友情と協調が 人間の文明を破壊から救う

秋篠宮皇嗣同妃両殿下、ご来賓の皆様、市民の皆様、関係者の皆様、心より感謝申し上げます。この賞は個人の業績もさることながら、時代を超えた普遍的なもの—友情、協調、連帯、多様性における寛容の価値を称える賞という想いを強くしています。こうした理想があるからこそ、様々な国の市民である私達を駆り立て、最上のアジア文化の創造、発展、保存を称えるべく、この福岡という歴史的・国際的都市に毎年集わせているのです。私はこの自らの声を冷静に主張するコミュニティの一員になることを、心から光栄に思っています。

私は太平洋戦争の終結から数ヶ月後に生まれました。私の両親は戦争の傷あとを子孫に受け継ぐことを良しと

はしませんでした。もちろん戦争中の、信頼を失うような行いも聞いていましたが、敵味方双方を個人で見ると、思いやりと誠実に満ちた行いが多かったことも知らされてきました。私の日本の友人・鶴見良行氏を両親に会わせた時、母は日本語で挨拶して彼を歓迎しました。この母の振る舞いで、戦争の記憶がぬぐい去られたかのように、2人はお互いを人と人として共感し合うことができました。

この美しい国を訪れるようになって40年。友情を通じてお互いの中に称賛すべき多くのものを見出しました。道義心、約束を守ること、敬意、寛大さ、思いやり、奉仕といったものです。これらの価値はあらゆる文化の中に存在し、日常の営みに意味を与えます。これらのおかげで私達は、人種や民族といった偶然の賜物から生じる小さな違いに埋没せずいられます。人の友情と協調という不朽の価値が、人間の文明を破壊から救うのだと私は思っています。

平和を愛する全てのフィリピン人の名においてこの賞を受け、妻と分かち合わせていただきたいと思います。5月に他界した妻にこの賞を捧げます。

### Interview



**質問:**福岡の印象はいかがですか？  
**ダビッド氏:**初めて訪れたのは32年前でしたが多くは変わらず残っていますね。トイレは綺麗で、歩道や公園も広いです。今回、騎士の称号を日本からいただいた気分です。日本に来るときは毎回、このメダルを持ってきたいと思っています。  
**質問:**社会学の興味深いところは？

**ダビッド氏:**生命を持ったもののように社会を見ることができるところです。その中には色々な人が住んでいて、社会が複雑になればなるほど、その中の構造もしっかりと見る必要があります。人間の複雑さを見ていく、そして問題があれば解決していく学問であるとも言えますね。

**質問:**アジアの知的文化的交流と相互理解に向けて重要なことは？

**ダビッド氏:**福岡市が取り組んでいることそのものが重要だと思います。つまり国が違う人達が集まること、文化の多様性を取り込むことです。自分が持っている独自の文化を基にして他の文化を知ることで、戦争も避けられるのではないかと思います。

### 学術研究賞

レオナルド・ブリュッセイ



#### 長年携わってきた アジアの歴史研究が 未来に役立つことを願って

日本列島の中でも九州は太古から世界に最も開かれた島でした。海は大陸を隔てるものですが、同時に大陸は海で繋がっています。孔子曰く「四海之内皆兄弟也」、つまり4つの海の中では全ての人兄弟です。

私は人生の大半をアジアの海域史と貿易の歴史研究に捧げてきました。この栄誉を賜るのに、“博多”という、いにしえの名高い港ほど相応しい場所はないと思います。

学生だった頃、幸運にも台湾、日本、中国の人類学、歴史学の第一人者から親身な教育を受けることができました。後に教鞭をとるよ

うになった時、恩返しをしたいと思い、アジア全域からやってくる留学生を迎えました。その後、学生の多くが大学の教員や教授となり、今では私の大切な研究仲間となっています。

この賞を昔も今も親身に私のことを気にかけてくれているアジアの研究者の方々に捧げたいと思います。

私生活でも教授としても海外からの研究者や若い学生を支援しようと努めてまいりました。歴史の資料や個人的知識、分析技術に関する考えなどを共有してまいりました。こういった努力は極めて重要で、世界的に継続していかなければならないと思います。

歴史研究というのは一次資料を批判的に評価する作業に基づくものです。今、国際社会は集団利益を偏重するアイデンティティの政治や国家主義的、宗教的なイデオロギーに脅かされています。しかし歴史研究は、これらに対する健全な解毒剤であり続けることを私は切に願っています。

### Interview



**質問:**子どもの頃から研究者を志していたのですか？  
**ブリュッセイ氏:**そうでもないです。子どもの頃は乗組員や船長になりたかったです。  
**質問:**ずっと海に興味があったのですか？  
**ブリュッセイ氏:**もちろん。歴史に興味はなかったのですが、50年前、将来の

世界はアジアの世界だと思いました。でも不幸だったことは、勉強し始めた頃に中国で文化革命が起こり中国に行けなかったことです。しかし台湾の先生に勧められ日本に来ることができました。  
**質問:**研究生生活の中で、最も嬉しかったことは？

**ブリュッセイ氏:**学生時代が一番良かったです。特に日本では面白い経験がありました。小さい村の住職や学生のアルバイトでエキストラもしました。高倉健の映画にも出ました。いつも悪いアメリカ人の軍人の役でした。

**質問:**若者たちにアドバイスをお願いします。

**ブリュッセイ氏:**側の人に関心を持つこと、それだけです。

### 芸術・文化賞

佐藤 信



#### 儂くも愛しい演劇の道を歩む 仲間達と分かち合いたい

秋篠宮皇嗣同妃両殿下、高島福岡市長、ご来賓の皆様、関係者の皆様、全ての福岡市民の皆様、第30回という記念の年に、この賞に名前を連ねる一人として迎えていただき、心からのお礼を申し上げます。

ここ福岡の地は1970年代・80年代と20年間に渡り黒テントによる全国公演をとおして度々お世話になった懐かしい土地です。テントを張った舞鶴公園や西公園、お世話になった沢山の方々と夜と徹して語り合ったことなど思い出は尽きません。演劇表現という分野は、その時その場所にだけ成立して、終わると跡形もなく消えてしまう、いさぎよとも儂いともいえるような特徴を

持っております。ですから私や同じ道を歩む仲間達にとって、思い出はかけがえのない特別なものです。情報技術の発達によって、鮮明な映像や音声を手軽に記録でき、地球上の様々な人と瞬時に共有できる時代を生きています。けれども、それらの情報は自分の体と五感を通して記憶し、折に触れて語り伝える思い出のように人間の経験や感情の核心を捉え蘇らせることはできません。今、ここに存在する人間への信頼を唯一の拠り所として活動を続けてきた劇場人として、テント演劇で国内外120都市を巡った20年間、アジア各地の演劇人達と友情を育んだ40年間の数々の思い出の中に、かけがえのない一つが加わった喜びと感謝を、友人・仲間達と分かち合わせていただきたいと思います。

新しい時代への架け橋としてのアジアにいち早く着目し、30年に渡りその価値の発見・継承・創造と人々の絆のための取り組みを続けてきた福岡市に深い尊敬の念を表させていただきます。

### Interview



**質問:**演出家・劇作家を志したきっかけを教えてください。  
**佐藤氏:**60年間何度も受ける質問なんです。実は覚えがないんです。しいて言えば子どもの頃、きょうだいや友だちから僕と遊んでいると面白くないと言われたんです。おままごとで入り口を決めて違う所から入ると違うと

言われてうるさいと怒られたんです。多分それが始まりだと思います。  
**質問:**この後特別披露される十二代目結城孫三郎様の演目の構成・演出を手掛けていらっしゃいますが、結城様とはどういったご関係ですか？  
**佐藤氏:**結城座は300年の伝統がある劇団で、20代の頃からお父様である十代目に可愛がっていただきました。伝統的な団体には珍しく新しいことを意欲的に取り組んでいらっしゃって、お父様と一緒にマクベスや、色々な新しい演目の演出をさせていただきました。また孫三郎さんとは同い年で、演劇の中で一緒に悪いことをしようとする仲間の一人なんです。

# ランドルフ・ダビッド

フィリピン/社会学者 *Randolf DAVID*

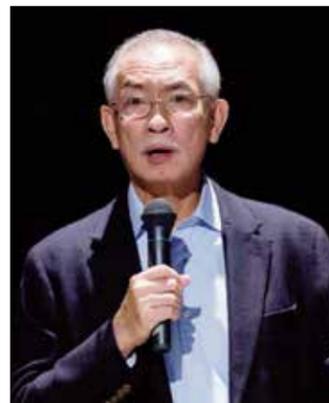
市民フォーラム

## フィリピン社会 ～民衆主役の社会発展の模索～

■ 開催日/9月13日(金) 18:30~20:30 ■ 参加者/120人  
 ■ 会場/福岡市科学館6階 サイエンスホール

### 第1部 基調講演

## 歴史、文化、そして政治 独自の経験が生み出したピープル・パワー



フィリピンの社会学者で、報道番組の司会兼制作も務めたダビッド氏。今回はフィリピンの政治、文化、歴史、そしてフィリピン社会を形成してきた重要な出来事について講演を行いました。

冒頭にダビッド氏は「今、フィリピンで何が起きているのか」という疑問を提起。これに対し簡単な答えはないとしながらも、フィリピン独自の経験について解説を始まりました。

まず、フィリピンの文化・歴史一民族コミュニティがバラバラで、スペイン支配下でも地域の対立を超えられなかったこと、その後、米国支配下で民主主義が植え付けられた際も土地所有者の少数支配が残っていたことなどについて説明がありました。これらの背景に様々な要因も加わり、「フィリピン人は長い間国を支配してきたエリートに怒りを感じ、庶民から指導者が生まれ権力につくことを望むようになった」といいます。

続いてダビッド氏は、フィリピンで成功した二つの政治家のタイプについて触れました。一つはマルコス大統領・ドゥテルテ大統領などの「強権的指導者」、もう一つはアキノ大統領などの「道徳的指導者」で、フィリピン人が惹きつけられたのは常に前者でした。そして、近年の政権一あらゆる権力を集中させたマルコス政権、道徳的な人柄で信任を受けたアキノ政権、社会や過去の指導者に怒りを抱く国民からカリスマ的支持を得たドゥテルテ政権について解説がありました。

中でもダビッド氏は、反対派のニノイ・アキノ暗殺後、国民がその未亡人コラシー・アキノを推してマルコス政権転覆に至った『ピープル・パワー革命』について熱く語りました。ピープル・パワーの概念は、権威主義の政権を平和裏に打倒するための世界的枠組となっており、今もフィリピン人の政治的意識の一部として残っているといいます。氏は、「法と文化のギャップ、近代憲法と国民的忠誠心のギャップを埋める正しい公式を見つけたら、民衆主役の社会発展の模索は終わらない。それは今の世代、次の世代へと、課題として受け継がれていくだろう」と講演を締めくくりました。

自身や自身と同じく活躍した亡妻カーリーナ氏の経験も巧みに交えながら、フィリピン社会について講演したダビッド氏。その抑揚ある語り口は報道番組のホスト役を彷彿とさせ、観客を強く惹きつけていました。



### 第2部 対談



コーディネーター 清水 展  
 (関西大学特任教授・  
 京都大学名誉教授)



対談者 藤原 帰一  
 (東京大学未来ビジョン研究センター長・  
 法学政治学研究所教授)

## フィリピンが直面する課題は フィリピンだけのものではない

第2部では、まず、当時のフィリピンにおいて、大学教授がテレビに出演し、英語が通例であった時事番組で庶民の言語であるタガログ語を使用するなど、いかにダビッド氏が国民や業界に影響を与える革新的取組をしたかということが語られました。続いて、『ピープル・パワー革命』では新しい代替政府を形作るまでには至らなかったという問題から、今日世界中に広がるポピュリズム、SNSが急激に政治風景を変えているといった話題まで、ジャズのセッションのようなテンポ良い対談が展開していききました。

観客からは「フィリピンを楽しむポイント」や「フィリピンの教育」に関する質問も投げかけられ、時に笑いを交えながら回答したダビッド氏。より一層フィリピンや世界の政治について知ることができ、興味が掻き立てられたひとときとなりました。

### 参加者の声

- 分かりやすいお話で、興味深くフィリピン社会の歴史とピープル・パワー革命について学ぶことができた。今後も他の国々の方のこのようなお話があると良いと思う。
- スライドの写真がとても興味深かった。すばらしい講演だった。
- 今の我々に大変参考になるフォーラムだった。先生方が福岡の若い人達と触れ合う機会が大事だと思った。
- 質の高い内容であり、とても参考になった。今後も続けてほしい。

# レオナルド・ブリュッセイ

オランダ/歴史学者  
 (東南アジア史専門家) *Leonard BLUSSÉ*

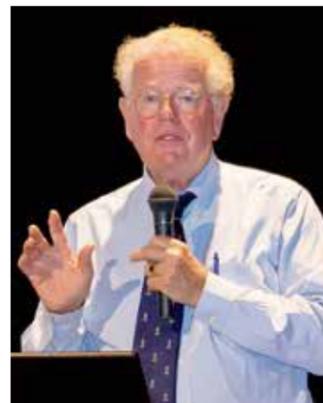
市民フォーラム

## 17世紀の東アジア海域と三人の冒険商人

■ 開催日/9月13日(金) 15:00~17:00 ■ 参加者/150人  
 ■ 会場/福岡市科学館6階 サイエンスホール

### 第1部 基調講演

## 騒乱の時代、交錯したそれぞれの人生 グローバル化初期に残した遺産とは



グローバル化の時代に生きる私たちが、歴史から学ぶべきものは何か。今から約400年前、政治的に大きな変動の時代を極東アジアで経験しつつも、グローバルに活躍した3人の人生を通して考えさせられる講演となりました。

「グローバル化のプロセスを見ていくにあたって、大きなタペストリーを編んでいると考えられます。何世紀にもわたる時間、優れた人が編んできたわけです。当初は緩やかなパッチワークでした。

様々なパターンが地域に生まれ、それを繋いでいただけにすぎませんでした。しかし徐々に均一のパターンが登場してきます。繋がる歴史が“グローバルな歴史”というひとつのタペストリーとなっていきます。現在、よく言われるグローバル化とは400年くらい前、お茶や砂糖、絹などが世界的に流通を始めた頃から始まっていました。そんなグローバル化の初期に活躍した角倉了以(すみのくらりょうい)親子、フランソワ・カロン、鄭成功(ていせいこう)親子は現在のグローバル化の先駆者であると言えます。日本や中国は西洋の干渉に長い間抵抗してきました。オランダ東インド会社(VOC)は東の海に乗り出し、ベースを日本と中国に築きたいと進出していきます。そんな中、3人はそれぞれでネットワークを広げ、同じ騒乱の時代のトラブルシューターとして名を残しました。3人はたまたま活躍したのではありません。知性・意思・個性を持つ、特出した能力の結果なのです。3人は騒乱の時期に於いて、先ほど話した“グローバルな歴史”というタペストリーの初期の織り手であったといえます。このタペストリーは現在も繋がりが続き、変わり続けているのです。多くの出来事を経験した彼らは多くの出来事を起こした人物でもあります。展望と勤勉さがなければ進歩しません。彼らの意思や勇気から学べることは数多いと思います」と締めくくりました。また京都・嵐山を訪れた際には、角倉了以像にぜひ会ってほしいとも語り、深い歴史の話に会場は聞き入っていました。



### 第2部 対談



コーディネーター 太田 淳  
 (慶應義塾大学経済学部教授)



対談者 松方 冬子  
 (東京大学史料編纂所准教授)

## 17世紀に国家の枠を超えて活発化した グローバル化を歴史から読み解く

人生の分かれ道を上手に辿っていくことができるだけでなく、新しい分かれ道を探し出した3人の冒険商人について対談は盛り上がりしました。「歴史に残るためには本人が立派だけでなく、レガシーを残していくため後の世の人の協力が必要。そういった意味でオランダの資料は重要だったか」との松方氏からの問いに、「ヨーロッパの目線からアジア人の活動を描いているのは面白い。歴史は人間のこと。17世紀に活躍した3人はみんな日本語ができたことがわかっている。だから今回のスピーチをしようと思った」とブリュッセイ氏。17世紀の歴史が今日まで続き、それぞれの「忠誠心」を持った3人の歴史が経済にまで繋がっていると締めくくり、歴史の面白さ、奥深さを知るフォーラムとなりました。

### 参加者の声

- タイムスリップして歴史の世界を楽しむことができた。人間の可能性について想いを馳せるひとときだった。
- 何百年も前に異国間で行動を取った先人について、詳細な研究と分析に基づく興味深い講演だった。
- オランダといえば東インド会社、まさに地元・オランダ人ならではの視点による展開は、非常に生き生きとして興味深く聴く事が出来た。
- 日本人でも知らなかった事を興味深く聞いた。もう一度勉強してみたいと思った。

佐藤 信

日本/劇作家、演出家 SATO Makoto

市民フォーラム

アジア、演劇、そして人びと：〈出会い〉を組織する

■ 開催日/2019年9月12日(木) 19:00~21:00 ■ 参加者/170人  
■ 会場/アクロス福岡 地下2階 イベントホール

第1部 パネルディスカッション

テーマ「今、アジアとはなにか」  
変化するアジアの捉え方を演劇論から展開



“アジア”をコンセプトにアジアの諸地域で活動を行ってきた佐藤氏の経歴に触れ、「アジア演劇」というものが昔とは違う局面を迎えていることについて、歴史的背景も交えつつ熱く意見交換されました。

今、日本の演劇界に求められていること、制度として整えられていることを数十年先取りしていたのではないかとアジア演劇。

近代演劇と相対化する試みとして「アジア演劇」という言葉があったが、今はアジア演劇を声高に掲げて活動は行われてはいないと分析しています。しかしアジアにおけるアーティスト同士の共同制作や、それぞれの場所・地域を訪れたり招いたりして行われるワークショップなど、活動は別の形態となってより活発に行われていることが映像とともに紹介されました。さらに「なぜアジアで活動を始めたのか」という問いに、「アジア」という言葉はアジア人が考えたわけではなく非ヨーロッパ圏のことを指した、他から与えられた言葉であることや日本の歴史的な関わりがアジアに興味を持った理由の一つであること、日本列島は間違いなくアジアの東の端であることからアジアについて考えざるを得なかった」という心境について語られました。佐藤氏が行っている活動の一つ「若葉町ウォーフ」でのワークショップの映像とともに、言葉が通じなくてもコミュニケーションが取れてしまう演劇の不思議な力について身振りを入れながら説明。今起きている3つの根本的な価値観の変化(シェア・ネットワーク・トランスポーターリング)についても述べられ、せっかくなので今の変化を捉えたいとの意見と、仲間への感謝の念で第1部は終了しました。



パネリスト 内野 儀  
(学習院女子大学日本文化学科教授  
東京大学名誉教授)



パネリスト 高橋 宏幸  
(演劇評論家  
桐朋学園芸術短期大学専任講師)

第2部 対談



対談者 渡辺 えり  
(劇作家・演出家・女優  
日本劇作家協会会長)



テーマ「演劇の夢」  
“人間”を観にいく面白さを伝えたい

40年間芝居を作り続けている渡辺氏との対談は、会場も巻き込み大いに盛り上がりました。佐藤氏が演劇の世界は華やかに思われがちだが、実際は人間臭くてみんなに近いところがあるので、年に2本は観てほしいと語ると、渡辺氏は「私は毎日観てもいい」と述べ、会場の笑いを誘いました。マイノリティにスポットを当てることができるのが演劇の良さだし、また日本ほど全く違う芝居をしている国はないのではとの見解を示し、同じ戯曲でも違う解釈で演じられることも多く、それを許している日本演劇の寛容さについて語られました。

一方で劇作家の世界はまだ男性社会であることへの疑問から、女性もたくさん活躍しているということをアピールするため劇作家協会会長を引き受けたという経緯や、演劇人はいつもギリギリのところで真剣勝負をしているという、表面ではわからない話も飛び出し、会場も熱気に包まれました。そして話はテーマである「演劇の夢」へ。渡辺氏の座右の銘「夢みる力」をヒントにテーマを考えたと佐藤氏。「演劇をとおして様々なことが一つになるのではないかと、だから夢見る力を信じたい」と意見が一致し、活気に満ちた対談が幕を閉じました。

参加者の声

- フォーラムに参加して、アジアについて過去・現在・未来について各方面から考えたいと思った。
- 演劇の中で自分の夢を実現されている佐藤氏はすばらしい、と感激した。同じ夢を見られる方々に囲まれているのは幸せなことだと思った。
- 受賞された佐藤氏の長年続けられてきた経験のすごさと、本人からのお話に感銘を受けた。
- 佐藤氏の受賞の主旨や氏自身の活動状況が理解できた。同年代の方が活動・活躍されていることに感服した。

受賞者による学校訪問

大賞

ランドルフ・ダビッド Randolph DAVID  
フィリピン/社会学者

■ 実施日/9月13日(金) 9:00~10:50  
■ 会場/春吉中学校

全生徒からフィリピン語で挨拶を受けたランドルフ・ダビッド氏。太鼓部の歓迎演奏を鑑賞した後、5名の生徒代表と壇上に上り「これからの国際社会で生きるために何か必要か」というテーマでディスカッションを行いました。生徒は英語を交えながら、日本とフィリピンの関係やフィリピンの子どもの夢を描いているかなどについて質問を投げかけました。ダビッド氏は互いの国の歴史や過去の経緯を理解した上で新しい関係を築いていくこと、自国の子どもたちの現状、さらに他国の文化を学ぶことの大切さを語りました。

一方、ダビッド氏は生徒に勉強などでプレッシャーを感じていないかと質問。生徒からは学習以外の活動や友人との励まし合いによって乗り越えられるという意見が出ました。最後にダビッド氏からは外国を旅行して多様な文化に出会って欲しいというメッセージ。全生徒はお礼として『夢の世界を』『ふるさと』を合唱し、花束を贈りました。



学術研究賞

レオナルド・ブリュッセイ Leonard BLUSSE  
オランダ/歴史学者(東南アジア史専門家)

■ 実施日/9月12日(木) 14:00~15:30  
■ 会場/松崎中学校

吹奏楽部による演奏での入場で盛大に迎えられたレオナルド・ブリュッセイ氏。生徒達が自己学習として行ったオランダと日本に関するプレゼンテーションに耳を傾けた後、近世東アジアの歴史を紐解きながら「郷に入っては郷に従え」というテーマで講演。江戸時代に日本や中国と唯一交易できたオランダ商人の暮らしや現地の人と同じように振る舞うことの大切さなどについて、その時代の絵とリンクさせながら語られました。

その後の質疑応答には堪能な日本語で答えたブリュッセイ氏。「今まで学んだ言語で難しいのは？」との問いに、「若い時に勉強するのなら難しいことはない。65歳で始めたスペイン語は難しく感じる。だから若い内に学んでほしい、そしてできれば英語だけではなくアジアの言葉や生活など隣の国のことを学んでください」と回答。他にも日本で経験したエキストラの話など笑いも交えたディスカッションは大いに盛り上がりました。最後に花束と手作りの記念品が渡され、生徒全員がオランダ語で挨拶。活気に満ちた講演会となりました。



芸術・文化賞

佐藤 信 SATO Makoto  
日本/劇作家、演出家

■ 実施日/9月13日(金) 11:00~12:30  
■ 会場/福岡女子高等学校

「誰かと出会う」をテーマに、学校では学べないような話や演劇の裏話など自身の体験をもとに、時折笑いも交えつつ講演が行われました。冒頭にあった校長先生の「貴重な話を聞けるこの時間に感謝してください」との言葉どおり、生徒たちは未知なる演劇空間の話に食い入るように耳を傾けていました。特に「高校時代がとても大事だった」という佐藤氏の話は、学生たちの悩みや気づきと切実にリンクしたようで、知識を吸収しようと熱心にメモを取る生徒も。佐藤氏は今の自分につながる本との出会い、町との出会い、人との出会いも全てこの時代が始まりだったと振り返りました。

質疑応答では海外でも自立できるためのアドバイスを求められ、「海外と自分の間に大きな壁はない。必ず自分の目で見て感じてください」と回答。さらに「“おかし、変だ”と思った感覚は大切に、捨てないでほしい。そして明日ではなく明後日を信じて」とエールを送りました。



# 第30回記念 歴代受賞者 によるシンポジウム

## 発展するアジアと文化の共存

福岡アジア文化賞、そして歴代受賞者がこれまでの30年間で  
守り、育て、新たに生み出してきたもの

■ 日時:9月10日(火) 15:00~16:30 ■ 会場:福岡国際会議場 多目的ホール

歴代受賞者

モデレーター



第29回(2018年)  
学術研究賞

末廣昭氏  
(日本/経済学者、  
地域研究者(タイ))



第28回(2017年)  
大賞

パースック・  
ボンパイチット氏  
(タイ/経済学者)



第28回(2017年)  
大賞

クリス・ベーカー氏  
(英国/歴史学者)



第26回(2015年)  
芸術・文化賞

ミン・ハン氏  
(ベトナム/  
ファッションデザイナー)



第23回(2012年)  
芸術・文化賞

キドラット・タヒミック氏  
(フィリピン/映画作家・  
アーティスト・文化観察者)



道傳 愛子氏  
NHK国際放送局  
シニアディレクター

第30回福岡アジア文化賞の開催を記念して開催された歴代受賞者によるシンポジウム。秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席のもと、世界の叢智である歴代受賞者の話を聞こうと多くの市民が来場。客席からの大きな拍手に迎えらるるように歴代受賞者がステージに登場し、第30回記念歴代受賞者によるシンポジウム「発展するアジアと文化の共存」の幕が開きました。



### 発展するアジア 1990-2019

はじめに、「発展するアジア」という大きなテーマについて、経済学者の視点から末廣昭氏(日本)が解説。アジア、とりわけ東アジアは、50年以上も前から世界中のどの地域よりも高い経済成長を続け貧困人口の削減にも成功したことから、「東アジアの奇跡(East

Asian miracle)」と呼ばれていたことを紹介。一方、90年代以降は経済格差が拡大しており、今後中国が中心となるアジアで私たちは新しい社会をどのように設計していけばいいのかと問題提起を行いました。



### 社会の発展によってもたらされた変化

#### 課題は不平等

社会が発展していく中で大きな課題は不平等にあると経済学者のパースック・ボンパイチット氏(タイ)。富の不平等という点でタイは世界で1、2位を争っており、社会が豊かになるにつれて貧富の差はどんどん広がっていると警鐘を鳴らしました。

#### 「文化」の発展

ファッションデザイナーのミン・ハン氏(ベトナム)は、社会の発展

により「気候変動」「災害」「テロの脅威」など新たな問題が生まれた、この世界が持続可能な発展を続けるためには、経済の発展に「文化」の発展が追いつき、両者のバランスが取れていることが必要だと説明。世界は多様な文化が存在することで成り立つと述べました。



#### 「森の精霊」「聖なる風の神」

映画作家で文化観察者のキドラット・タヒミック氏(フィリピン)は、フィリピン・ルソン島北部の山奥で暮らすイフガオ族の生活を紹介。三千年前、イフガオ族は「森の精霊」や「聖なる風の神」を敬い、森、里山などの「自然」と調和をとって生活をしてきた。しかし、入植者の出現をきっかけとして、子どもたちはチェーンソーを手にとるようになり、森の木々を伐採するようになったと説明。我々人間は、古くからある文化に一度立ち返る必要があると客席に訴えました。



#### アジアの持続可能な社会の実現のために「文化」が果たす役割

続くテーマは「アジアの持続可能な社会の実現のために「文化」が果たす役割」。文化を守り、継承することの大切さと、アジアの持続可能な社会の実現のために「文化」がどのような役割を果たしていくことができるのか、活発な意見が交わされました。

#### 国境を越える「文化」

「文化」とは「美しいもの」を意味しているとクリス・ベーカー氏(英国)。美しい音楽や絵画、ファッションは国境を簡単に越えることができる。イフガオ族が暮らす美しい棚田の風景も然り。しかし「言葉」は、それがどんなに美しくても国境を簡単に越えることはできないと説明。

自らタイの古代詩の翻訳を手掛けるクリス・ベーカー氏は、人間には元来多様な文化に対する好奇心が備わっている、翻訳は、言葉の壁を取り除く作業で、異なる文化の人間の距離を近づける一助になっていると述べました。

共に翻訳を手掛けるパースック・ボンパイチット氏も、異なる文化とコミュニケーションをとりたいという人間の好奇心が、今、世界中で起きている文学作品の翻訳ブームへとつながっていると説明。文学作品を読むことで、その国の文化や、そこで暮らす人間の考え方が分かると述べました。



#### 文化は「原動力」

一方、ミン・ハン氏は、文化は深いレベルで経済に影響を与えており、文化は社会が発展し続けるための「原動力」であり必要不可欠なものであると説明。文化の発展から最も恩恵を受けるのは我々人間であると述べました。

#### 福岡アジア文化賞が果たしてきた役割

90分という限られた時間の中で、歴代受賞者の叢智に触れ、享受してきたシンポジウムもついに終わりの時を迎えます。

福岡アジア文化賞は新しい交流の形であると末廣昭氏。クリス・ベーカー氏は、福岡アジア文化賞は私たちに進むべき道を照らし示してくれる灯台のような存在、この唯一無二の賞を創設した福岡市の皆さまの先見の明に敬意と感謝の意を表しますと述べました。

歴代受賞者から市民へメッセージが送られる中、「本日お越しの皆さまがアジアとの出会いを重ねられる毎に、この『福岡アジア文化賞』というストーリーは続いていきます」と、今回のシンポジウムでモデレーターを務めた道傳愛子氏が締めくくり、第30回記念歴代受賞者によるシンポジウムは幕を閉じました。



# 第30回記念パネル展

福岡アジア文化賞が30回目という節目を迎えることを記念し、下記の2会場において、30年の歩みを振り返るパネル展を開催しました。

■ 会場: 福岡アジア美術館 7階 アートカフェ ■ 日時: 2019年8月22日(木)~9月24日(火)(休館日除く)



入口のタイトルパネル  
ロゴの波は福岡の海岸線を表す



本賞の概要や受賞者のメッセージパネル  
第30回受賞者の巨大タペストリーなど



キッズコーナーではぬり絵  
コンテストも開催



100名を超える歴代受賞者の顔写真  
パネル



受賞者ゆかりの書籍も盛りだくさん  
パネル



書棚の一角にも特設書籍コーナーを作成

■ 会場: 福岡国際会議場 2階ロビー ■ 日時: 2019年9月10日(火)



来場者の目を楽しませるパネルや動画、作品の数々



受賞者の顔写真をのせた帆船型  
タペストリー  
本賞の新たな船出をイメージ



30年間の歩みや受賞者のメッセージ  
を記したパネル、第29回までの報告  
書も展示



自筆原稿や色紙など、大変貴重な  
受賞者ゆかりの品



第30回受賞者とシンポジウム登壇者  
の巨大メモリアルタペストリー

## 共催・協力事業

### 福岡アジア文化賞30周年記念 アジアのアーティスト ハイライト展

福岡アジア美術館の常設展に福岡アジア文化賞のコーナーを設け、歴代受賞者の美術作品を展示

- 日時: 2019年7月11日(木)~9月24日(火)
- 会場: 福岡アジア美術館 アジアギャラリー
- 主催: 福岡アジア美術館
- 展示作家: 1999年(第10回)芸術・文化賞  
タン・ダウ氏  
2001年(第12回)芸術・文化賞  
タウン・ダッチャニー氏 など



タウン・ダッチャニー氏「我」  
1989年 福岡アジア美術館蔵



### 福岡アジア文化賞30周年記念上映

福岡アジア文化賞を受賞した映画人たちの作品を上映

- 日時: 2019年7月10日(水)~15日(月・祝)
- 会場: 福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ
- 主催: 福岡市総合図書館  
映像ホール・シネラ実行委員会
- 上映作品: 『羅生門』(監督: 1990年(第1回)創設特別賞  
黒澤 明氏)  
『頬にキス』(音楽: 2016年(第27回)大賞  
A.R.ラフマン氏) など



『羅生門』1950年/35ミリ/モノクロ/88分/日本



『頬にキス』2002年/35ミリ/カラー/136分/インド

### ランドルフ・ダビッド氏 2019年(第30回)福岡アジア文化賞 大賞受賞記念上映

ランドルフ・ダビッド氏と親交が深かったマリルー・ディアス=アバヤ氏(2001年(第12回)芸術・文化賞)の監督作品を上映

- 日時: 2019年9月10日(火)・11日(水)
- 会場: 福岡市総合図書館  
映像ホール・シネラ
- 主催: 福岡市総合図書館  
映像ホール・シネラ実行委員会
- 上映作品: 『マドンナ・アンド・チャイルド』  
『ホセ・リサール』



『マドンナ・アンド・チャイルド』1996年  
35ミリ/カラー/121分/フィリピン



『ホセ・リサール』1998年  
35ミリ/カラー/175分/フィリピン



11日(水)は映画上映前にダビッド氏が舞  
台挨拶、アバヤ監督について熱く語る

## 報道

第30回福岡アジア文化賞の授賞式や受賞者、第30回記念シンポジウム等について、国内外の新聞や雑誌、インターネットニュース等で報道されました。



授賞式の様子  
©Filipino-Japanese Journal



受賞者インタビュー「悲劇喜劇」  
2019年11月号掲載 ©早川書房



第30回記念シンポジウムについて  
©Bangkok Post



# 福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

## FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990 - 2018

第1回

創設特別賞

**巴金**  
BA Jin  
(中国/作家)



『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

**黒澤明**  
KUROSAWA Akira  
(日本/映画監督)



『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

**ジョゼフ・ニードム**  
Joseph NEEDHAM  
(英国/中国科学史研究者)



中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

**ククリット・プラモート**  
Kukrit PRAMOJ  
(タイ/作家・政治家)



大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をもった文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

**矢野暢**  
YANO Toru  
(日本/社会学者)



日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回

大賞

**ラヴィ・シャンカール**  
Ravi SHANKAR  
(インド/音楽家・シタール奏者)



豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

**タウフィック・アブドゥラ**  
Taufik ABDULLAH  
(インドネシア/歴史学者・社会学者)



東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

学術研究賞

**中根千枝**  
NAKANE Chie  
(日本/社会人類学者)



アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

**ドナルド・キーン**  
Donald KEENE  
(米国/日本文学・文化研究者)



大著『日本文学史』はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回

大賞

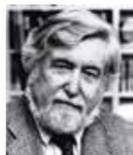
**金元龍**  
KIM Won-yong  
(韓国/考古学者)



東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

**クリフォード・ギアツ**  
Clifford GEERTZ  
(米国/文化人類学者)



インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

**竹内實**  
TAKEUCHI Minoru  
(日本/中国研究者)



社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

**レアンドロ・V・ロクシン**  
Leandro V. LOCSIN  
(フィリピン/建築家)



東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回

大賞

**費孝通**  
FEI Xiaotong  
(中国/社会学・人類学者)



中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

**ウンク・A・アジズ**  
Ungku A. AZIZ  
(マレーシア/経済学者)



マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

**川喜田二郎**  
KAWAKITA Jiro  
(日本/民族地理学者)



ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

**ナムジリン・ノロバンザト**  
NAMJILYN Norovbanzad  
(モンゴル/音楽家)



モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した音楽家。

第5回  
1994

大賞

**スパトラディット・ディッサクン**  
M. C. Subhadradis DISKUL  
(タイ/考古学・美術史学者)



タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界的地位づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

**王廣武**  
WANG Gungwu  
(オーストラリア/歴史学者)



華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

**石井米雄**  
ISHII Yoneo  
(日本/東南アジア研究者)



タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

**パドマー・スブラマニヤム**  
Padma SUBRAHMANYAM  
(インド/舞踊家)



インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回  
1995

大賞

**クンチャラングラット**  
KOENTJARANINGRAT  
(インドネシア/文化人類学者)



インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

**韓基彦**  
HAHN Ki-un  
(韓国/教育学者)



独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

**辛島昇**  
KARASHIMA Noboru  
(日本/歴史学者)



刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

**ナム・ジュン・パイク**  
Nam June PAIK  
(米国/ビデオ・アーティスト)



テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回  
1996

大賞

**王仲殊**  
WANG Zhongshu  
(中国/考古学者)



古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

**ファン・ファイレ**  
PHAN Huy Le  
(ベトナム/歴史学者)



イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新発見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

**衛藤 藩吉**  
ETO Shinkichi  
(日本/国際関係研究者)



中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

**ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン**  
Nusrat Fateh Ali KHAN  
(パキスタン/カウワーリー歌手)



イスラーム宗教歌謡カウワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回  
1997

大賞

**チェン・ボン**  
CHHENG Phon  
(カンボジア/劇作家・芸術家)



内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞

**ロミラ・ターパル**  
Romila THAPAR  
(インド/歴史学者)



独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞

**樋口隆康**  
HIGUCHI Takayasu  
(日本/考古学者)



フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞

**林権澤**  
IM Kwon-taek  
(韓国/映画監督)



韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回  
1998

大賞

**李基文**  
LEE Ki-Moon  
(韓国/言語学者)



韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞

**スタンレー・J・タンバイア**  
Stanley J. TAMBIAH  
(米国/人類学者)



タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞

**上田正昭**  
UEDA Masaaki  
(日本/歴史学者)



日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞

**R. M. スダルソノ**  
R. M. Soedarsono  
(インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)



芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

**大賞**  
侯孝賢  
HOU Hsiao-hsien  
(台湾/映画監督)

**学術研究賞**  
大林 太良  
OBAYASHI Taryo  
(日本/民族学者)

**学術研究賞**  
ニティ・イヨウシーウォン  
Nidhi EOSEEWONG  
(タイ/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
タン・ダウ  
TANG Da Wu  
(シンガポール/ヴィジュアルアーティスト)

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て『悲情城市』などの名作を生んだ世界的な映画監督。

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究的の泰斗。

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

**大賞**  
プラムディヤ・アナンタ・トゥール  
Pramoedya Ananta TOER  
(インドネシア/作家)

**学術研究賞**  
タン・トゥン  
Than Tun  
(ミャンマー/歴史学者)

**学術研究賞**  
ベネディクト・アンダーソン  
Benedict ANDERSON  
(アイルランド/政治学者)

**芸術・文化賞**  
ハムザ・アワン・アマット  
Hamzah Awang Amat  
(マレーシア/影絵人形遣い)

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

厳密で実証的な歴史学的方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

第12回 2001

**大賞**  
ムハマド・ユヌス  
Muhammad YUNUS  
(バングラデシュ/経済学者)

**学術研究賞**  
速水 佑次郎  
HAYAMI Yujiro  
(日本/経済学者)

**芸術・文化賞**  
タワン・ダッチャニー  
Thawan DUCHANEE  
(タイ/画家)

**芸術・文化賞**  
マリルー・ディアス=アバヤ  
Marilou DIAZ-ABAYA  
(フィリピン/映画監督)

『グラミン銀行』を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

**大賞**  
張芸謀  
ZHANG Yimou  
(中国/映画監督)

**学術研究賞**  
キングスレー・M・デ・シルワ  
Kingsley M. DE SILVA  
(スリランカ/歴史学者)

**学術研究賞**  
アンソニー・リード  
Anthony REID  
(オーストラリア/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
ラット  
Lat  
(マレーシア/マンガ家)

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

**大賞**  
外間 守善  
HOKAMA Shuzen  
(日本/沖縄学者)

**学術研究賞**  
レイナルド・C・イレート  
Reynaldo C. ILETO  
(フィリピン/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
徐 冰  
XU Bing  
(中国/アーティスト)

**芸術・文化賞**  
ディック・リー  
Dick LEE  
(シンガポール/シンガーソングライター)

『沖縄学』を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた。アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

**大賞**  
アムジャッド・アリ・カーン  
Amjad Ali KHAN  
(インド/サロッド奏者)

**学術研究賞**  
厲以寧  
LI Yining  
(中国/経済学者)

**学術研究賞**  
ラーム・ダヤル・ラケッシュ  
Ram Dayal RAKESH  
(ネパール/民俗文化研究者)

**芸術・文化賞**  
ローランド・シルワ  
Roland SILVA  
(スリランカ/文化遺産保存建築家)

インド古典楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超越する」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

**大賞**  
任東権  
IM Dong-kwon  
(韓国/民俗学者)

**学術研究賞**  
トー・カウ  
Thaw Kaung  
(ミャンマー/図書館学者)

**芸術・文化賞**  
ドアン・ウワン・ブンニャウォン  
Douangdeuane BOUNYAVONG  
(ラオス/織物研究者)

**芸術・文化賞**  
タシ・ノルブ  
Tashi Norbu  
(ブータン/伝統音楽家)

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文獻保存学の泰斗。

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

**大賞**  
莫言  
MO Yan  
(中国/作家)

**学術研究賞**  
シャグダリン・ピラ  
Shagdaryn BIRA  
(モンゴル/歴史学者)

**学術研究賞**  
濱下 武志  
HAMASHITA Takeshi  
(日本/歴史学者)

**芸術・文化賞**  
アクシムフティ  
Uxi MUFTI  
(パキスタン/民俗文化保存専門家)

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

**大賞**  
アシシュ・ナンディ  
Ashis NANDY  
(インド/社会・文明評論家)

**学術研究賞**  
シーサク・ワンリポードム  
Srisakra VALLIBHOTAMA  
(タイ/人類学・考古学者)

**芸術・文化賞**  
朱 銘  
JU Ming  
(台湾/彫刻家)

**芸術・文化賞**  
金徳洙  
KIM Duk-soo  
(韓国/伝統芸能家)

臨床心理学と社会学を統合させた独自の学術的方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

**大賞**  
アン・ホイ  
Ann HUI  
(香港/映画監督)

**学術研究賞**  
サヴィトリ・グナセーカラ  
Savitri GOONESEKERE  
(スリランカ/法学者)

**学術研究賞**  
シャムスル・アムリ・バハルディーン  
Shamsul Amri Baharuddin  
(マレーシア/社会人類学者)

**芸術・文化賞**  
フォリダ・パルビーン  
Farida Parveen  
(バングラデシュ/音楽家)

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

**大賞**  
**オギュスタン・ベルク**  
 Augustin BERQUE  
 (フランス/文化地理学者)



欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

**学術研究賞**  
**パルタ・チャタジー**  
 Partha CHATTERJEE  
 (インド/政治学・歴史学者)



正統な歴史から振り返りとされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭的な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

**芸術・文化賞**  
**三木 稔**  
 MIKI Minoru  
 (日本/作曲家)



邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

**芸術・文化賞**  
**蔡國強**  
 CAI Guoqiang  
 (中国/現代美術家)



北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

**大賞**  
**黄秉冀**  
 HWANG Byung-ki  
 (韓国/音楽家)



韓国の伝統的楽器「伽倻琴(カヤグム)」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

**学術研究賞**  
**ジェームズ・C・スコット**  
 James C. SCOTT  
 (米国/政治学者・人類学者)



東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

**学術研究賞**  
**毛里 和子**  
 MORI Kazuko  
 (日本/現代中国研究者)



アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

**芸術・文化賞**  
**オン・ケンセン**  
 ONG Keng Sen  
 (シンガポール/舞台芸術家)



現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く、世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

**大賞**  
**アン・チュリアン**  
 ANG Choulean  
 (カンボジア/民族学者・クメール研究者)



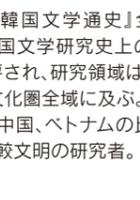
「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

**学術研究賞**  
**趙 東一**  
 CHO Dong-il  
 (韓国/文学者)



主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

**芸術・文化賞**  
**ニールズ・グツチョウ**  
 Niels GUTSCHOW  
 (ドイツ/建築史家・修復建築家)



南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

**大賞**  
**A.R.ラフマン**  
 A. R. RAHMAN  
 (インド/作曲家・作詞家・歌手)



民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

**学術研究賞**  
**アンベス・R・オカンポ**  
 Ambeth R. OCAMPO  
 (フィリピン/歴史学者)



著書やメディアを通じた発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

**芸術・文化賞**  
**ヤスミン・ラリ**  
 Yasmeen LARI  
 (パキスタン/建築家・建築史家・人道支援活動家)



数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

**大賞**  
**ヴァンダナ・シヴァ**  
 Vandana SHIVA  
 (インド/環境哲学者)



開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

**学術研究賞**  
**チャーンウィット・カセートシリ**  
 Charnvit KASETSIRI  
 (タイ/歴史学者)



アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

**芸術・文化賞**  
**キドラット・タヒミック**  
 Kidlat TAHIMIK  
 (フィリピン/映画作家・アーティスト・文化観察者)



途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

**芸術・文化賞**  
**クス・ムルティア・パク・ブウォノ**  
 G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono  
 (インドネシア/宮廷舞踊家)



幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

**学術研究賞**  
**王 名**  
 WANG Ming  
 (中国/行政学者、NGO・市民社会研究者)



中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

**芸術・文化賞**  
**コン・ナイ**  
 KONG Nay  
 (カンボジア/吟遊詩人、チャバイ・マスター)



内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャバイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

**大賞**  
**中村 哲**  
 NAKAMURA Tetsu  
 (日本/医師)



パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

**学術研究賞**  
**テッサ・モーリス＝スズキ**  
 Tessa MORRIS-SUZUKI  
 (オーストラリア/アジア地域研究者)



民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

**芸術・文化賞**  
**ナリニ・マラニ**  
 Nalini MALANI  
 (インド/アーティスト)



映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日のかつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

**芸術・文化賞**  
**アピチャップン・ウィーラセタクン**  
 Apichatpong WEERASETHAKUL  
 (タイ/映画作家・アーティスト)



民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像手法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

**大賞**  
**エズラ・F・ヴォーゲル**  
 Ezra F. VOGEL  
 (米国/社会学者)



戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業地域(NIEs)の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

**学術研究賞**  
**アジュマルディ・アズラ**  
 Azyumardi AZRA  
 (インドネシア/歴史学者)



イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多面的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

**芸術・文化賞**  
**ダニー・ユン**  
 Danny YUNG  
 (香港/文化クリエイター)



多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

**大賞**  
**タン・ミン・ウー**  
 Thant Myint-U  
 (ミャンマー/歴史学者)



グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

**学術研究賞**  
**ラーマチャンドラ・グハ**  
 Ramachandra GUHA  
 (インド/歴史学者・社会学者)



民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

**芸術・文化賞**  
**ミン・ハン**  
 Minh Hanh  
 (ベトナム/ファッションデザイナー)



ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

**大賞**  
**A.R.ラフマン**  
 A. R. RAHMAN  
 (インド/作曲家・作詞家・歌手)



民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

**学術研究賞**  
**アンベス・R・オカンポ**  
 Ambeth R. OCAMPO  
 (フィリピン/歴史学者)



著書やメディアを通じた発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

**芸術・文化賞**  
**コン・ナイ**  
 KONG Nay  
 (カンボジア/吟遊詩人、チャバイ・マスター)



内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャバイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

**大賞**  
**パースック・ボンパイチットおよびクリス・ベーカー**  
 Pasuk PHONGPAICHT & Chris BAKER  
 (タイ/経済学者) & (英国/歴史学者)



タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

**学術研究賞**  
**王 名**  
 WANG Ming  
 (中国/行政学者、NGO・市民社会研究者)



中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

**芸術・文化賞**  
**コン・ナイ**  
 KONG Nay  
 (カンボジア/吟遊詩人、チャバイ・マスター)



内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャバイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

**大賞**  
**賈樟柯**  
 JIA Zhangke  
 (中国/映画監督)



21世紀の中国を代表する映画監督。急激に経済発展する社会的歪みの中で、苦悩しながらもたたかき生きる若い人々を等身大に描いた作品は、世界的に高く評価されている。

**学術研究賞**  
**末廣 昭**  
 SUEHIRO Akira  
 (日本/経済学者、地域研究者(タイ))



タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、日本のアジア研究の発展に主導的な役割を果たすなど、日本におけるアジア経済研究の第一人者。

**芸術・文化賞**  
**ティージャン・バーイー**  
 Teejan Bai  
 (インド/バンドワーマスター)



古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』に基づく歌謡のバンドワーマスターの第一人者。先住民であり女性であることで二重にインド社会から差別される中で歌い続け、人々に勇気を与えている。